

平成 28 年度 高浜市「防災ネットきずこう会」事業報告書

【目的】「自助・共助・公助」を基本とした防災・減災対策を進めることを目標に、以下のポイントを重点として体系的に学習していく。

1. 地域における防災・減災対策を推進していくリーダーを養成する（前期・後期各 30～40 名程度）
2. 市内に在住する外国人（主にブラジル人）に対する防災・減災にかかる啓発事業を行う。
3. 地域行動計画に基づく津波訓練を、港小学校区を対象に実施する。

【日程・事業概要】

実施日時等	内容	講師等
6月11日（土） 13:30～16:30 高浜市役所	防災リーダー養成講座（前期） ・講演「地域の防災力を高めよう」（90分程度） 警戒される南海トラフ巨大地震などに備え、過去の災害現場での実態からの学びを概観し、地域でできる防災・減災活動について解説する。 ・ワークショップ（90分） 1班5～6人程度のグループに分かれ、現時点での地域防災活動の実績や課題を出し合い、今後の防災・減災活動につながる具体的な企画を協議する。	RSY 代表理事 栗田暢之・松山文紀
7月17日（日） 9:00～12:00 高取公民館	防災リーダー養成講座（後期） ・講演「避難所運営のポイント」（90分程度） RSY 作成「避難所運営の知恵袋」をテキストに、誰もが安心して過ごせる避難所運営のポイントを解説する。 ・ワークショップ（90分） 1班5～6人程度のグループに分かれ、避難所運営について課題を出し合い、特に高齢者、障がい者、乳幼児・妊婦等にとっても過ごしやすい避難所について協議する。	RSY 常務理事 浦野愛・椿佳代
9月4日（日） 7:30～11:30 高浜小学校ほか	津波避難訓練（平成28年度高浜市総合防災訓練） ・津波被害が想定される港小学校区について、津波警報発令時における避難訓練（港小学校ではなく高浜小学校へ避難）を、地域行動計画に基づき実施する。	RSY 代表理事・栗田暢之・浜田ゆう・森本佳奈
2月25日（土） 13:00～16:00 八幡・新田町内 会館きずな	外国人向け防災・減災イベント 「～ジシン・カサイ・ゴキンジョってなあに？」 ・外国人向け「地震防災ガイド」を作成し配布する。 ・なまず号（愛知県地震体験車）試乗体験 ・水消火器体験・大声コンテスト・居住地確認等 ・ブラジル風ホットドッグの炊き出し（地域住民にも振る舞う）	RSY 代表理事 栗田暢之・浜田ゆう・森本佳奈

※ 防災リーダー養成講座

- ・ 高浜市独自の認定を行う。
- ・ 参加しやすい条件を整えるため、半日を2日間程度（前期および後期開催）とする。
- ・ 対象者は、町内会役員を交代した方等18町内会+5まち協から1～2名ずつ参加、30～40名程度。

※ 津波避難訓練

- ・ 津波被害が想定される港小学校区について、津波警報発令時における避難訓練（港小学校ではなく高浜小学校へ避難）を、地域行動計画に基づき実施する。
- ・ 当該住民が一体となって参加できるよう、日程を高浜市総合防災訓練と同日にする。

※ 外国人向け防災・減災イベント

- ・ 当該外国人のリーダー的な方を訪問し、かつ当該県営住宅で事前の説明会を開催し、イベント実施に向けてより多くの当事者の参画または参加に向けた理解・調整を促す。

1. 防災リーダー養成講座（前期）
「地域防災力の向上に向けて～熊本地震の現場を踏まえて」

- 日時:平成 28 年 6 月 11 日(土) 13:30～16:30
- 場所: 高浜市役所
- 参加: 34 名

□ 講義「地域の防災力を高めよう」
講師: RSY 栗田暢之

まずは、今年 4 月に発生した熊本地震の現場の話をしていきます。現在まで月の半分くらい熊本に入っています。この地震の特徴は、前震と本震の 2 回も震度 7 が襲ったこと、また余震が連日続いているということ。屋根は今でもブルーシートだらけで、瓦屋根を修繕するといっても、業者は極端に混み合い、すぐには対応できない。かといって危険な作業のため、ボランティアメニューにはない。国からは 576,000 円を上限とする応急修理制度があるという程度（半壊は所得制限あり）であり、しばらくこの課題が続くであろう。またこの制度は少々ややこしく、いわゆる応急危険度判定と、一部損壊・半壊・大規模半壊・全壊などの「り災証明」との判定は異なることに加え、この認定を受けて初めて様々な支援制度が活用できる。なお、応急修理を選択すると応急仮設住宅には入れない。一方で、通常では半壊だと仮設住宅には入れないが、今回は特別措置で家屋を解体するなら仮設に入れるようになっている。こうした制度も被災者一人ひとりが一軒一軒申請しないと進まないが、はたして高齢者がこのような複雑な制度を理解できるのか、そもそも「またいつ余震が来るかわからない」という不安の中で、その日暮らすのが精いっぱいという段階でもある。

こうした背景から、自宅に留まることができなくて、避難所暮らしの方がなかなか減らない。そして、今回の地震でも避難所の環境は過酷で、せめてプライバシーが保てる車中泊を選択した人も多い。しかし「エコノミークラス症候群」が懸念される中、その注意喚起をしても、危険性を知らない人が多いのには驚いた。また自宅敷地内の納屋や庭、ビニールハウスに住んでいるケースもある。避難＝指定避難所だけの対策では何ともならないのが現実である。そしてすぐに必要となる水や食料などの支援物資を全国から受け入れる窓口になるのが行政だが、行政だけでは受けられるものではない。地震直後か

ら連日、昼夜を問わず、10t トラックが何台も数珠つなぎになり、中には受け手の段取りが全くできていない状況でも物資が送られてくる。これではモノが滞るのは当たり前である。そしてもっと大切なのは、「防災・減災」の視点から言えば、結局、熊本の皆さんは備蓄していましたか、3 日間分ぐらいは各自で備えることが基本ですよ、と問いたい。熊本地震からの教訓は、行政がもっと迅速に対応せよ、ということではなく、市民自身が対策しているかが課題である。なお、それでも熊本地震では 3 日ほどで物資が届いたが、スーパー広域災害とも言われている南海トラフ地震の際に、高浜市へは物資がいつ届くでしょうか。東日本大震災の事例からも「当分は来ない」と思った方がいい。

避難所対策の基本は、とにかく命と最低限の暮らしを守り、人間の尊厳が大事にされることである。この意味で、今回も残念な事例が絶えなかった。重度障害者の 20 代女性が一般の避難所にいた。「福祉避難所はどうなっているか」と、町役場に問い合わせるが十分に対応はできていない。せめてパーテーションくらいは用意できなかったのか。その隣には、100 歳になる女性も毛布一枚を敷いて寝ている。段ボールベッドはないのか？福祉避難所を機能させるためには行政側がキッチンと対応しなければならない。また、子どもたちもストレスをため、グラウンドや公園は車中泊の車だらけで遊ぶ場も居場所もない。そして避難所内を走り回り、怒られる。こうした避難所環境の改善は、行政も知識や経験がないことから、すぐには対応できないのである。ただし、行政だけが悪いわけではない。本来は、避難者自身が必要な助け合いや最低限のルーブリックなどに携わらなければ、避難所改善は進められない。

益城町の総合体育館では、自動ドアと自動ドアの間にも避難者が居る状況。益城町の職員は 200 人程度だが、その半数が避難所対応にあたった。言ってみれば、上げ全据え膳で対応していた。結果として、り災証明の発行が遅れるなど、行政にしかできないことがどんどん遅れてしまった。一方で、避難所の運営支援を今回ほど NPO に求められた例もないが、すでにボランティア団体や NPO は 200 団体以上いた中で、残念ながら避難所の環境改善ができる団体は少ない。その中でも、熊本市では 700 か所あった避難所を 180 か所に集約する話が急にあつた。いつまでも学校が避難所ではいけないことが理由である。少々無理な要求だとは思ったが、こ

の集約を機に、あたり前の日常（炊事・洗濯・掃除など）を避難所内でも取り戻すことが必要だと考えた。日中は高齢者だらけ、大相撲中継があると人が集まるが、それ以外は集まらない。NPOなども避難所に入りながら、サロンなどをやり始め、地元組織に引き継ごうとしている。そんな中、益城町総合体育館は熊本YMCAが指定管理をしていた。さすがはYMCA。全国からYMCAの職員や関連するボランティアが続々と支援に入り、被災した子どもたちを集め（わくわくワーク隊）、毎朝9時から避難所の清掃活動を行った。子どもが掃除を始めると、避難者は自然とゴミの分別を始めた。何より、子どもから毎朝元気に「おはようございます」と声かけられれば、自然と避難所の雰囲気も明るくなる。行政対住民だけでは大変なことも、住民対住民・ボランティアとなると変わってくる。別の避難所では、布団干しをNPOが呼びかけて、震災から1カ月以上を経て、初めて布団干しをした。布団を干しているうちに、避難者の間ではお茶のみ会が始まり、集まる場ができた。つまり、行政が住民に施すという形態では何も進まない、限界があるということだ。住宅を失い避難所しか行く場所がない方でも、避難所運営には携わる必要がある。行政がすべてをやっ

てくれるわけではないことを確認しておきたい。トラブ巨大地震が発生したら、他からの支援は当期期待できない。高浜市は高浜市内で助け合うしか方法はないのである。備えるか、備えないか、やるか、やらないか、住民次第である。本日の参加者は、今こそリーダーとして啓発の先頭に立ってほしい。また、宇土市では市の庁舎が全壊し、体育館を代用している。それは復興が遅れることを意味する。災害救援の柱は行政であり、その行政の庁舎に被害があると救援が進まない。この意味で、高浜市役所の新築は喜ばしいことである。また、高浜市は4mの津波も襲う想定があるので、東日本大震災の津波被害のことを考えてしまうが、高浜市では適切な避難をすれば助かるのだということも認識を深めるべきだ。ただし、地域に中心となって避難を呼びかける人がいるかどうか問われる。釜石の奇跡などの話もあるが、地域の助け合いで命が助かった例は各地にある。七ヶ浜の事例からも、子どもの方がキチンと行動できている。大人ほど、普段から訓練しなくてはならない。それを高浜市民ができるかどうか。これまでも、高浜市で様々な取り組みを実施してきたが、地域の防災リーダーとして、しっかり関わっていただきたい。

阪神・淡路大震災
20年の節目に改めて考える

阪神・淡路大震災（平成7年）の死者の多くは、家具の転倒防止など、あらかじめ各自が対策を行っていたら救われていたといわれています。また、救助された人の約8割が地域住民による救出で、そのうち約8割は生存者の救助でした。一方、自衛隊・消防隊による救助は約2割ですが、そのうち半数以上は遺体の救出でした。消防車は台数にかぎりがあり、家屋やブロック塀の倒壊、液状化がおきていけば、道路を通することもできません。行政力を過信してはいけません。早い救出が生死を分けました。いざというとき、ご近所の同士の助け合い・支え合いが鍵なのです。

東日本大震災（平成23年）の津波の印象が強く残っていますが、家具の下敷きになってしまったり、津波から逃げることもできません。また、火災の場合でも、火が小さなうちに消すことができれば、

一人ひとりの意識向上と実践の積み重ねが地域の防災力を高める!



栗田暢之氏

認定特定非営利活動法人レスキューストックセード代表理事。ほかに、東日本大震災支援全国ネットワーク代表世話人、震災がつなぐ全国ネットワーク代表などを務めている。

今の、未来の子どもたちを守るために

過去の災害の教訓を風化させず、教訓として活かすことが大切です。例えば伊勢湾台風（昭和34年）からは60年近くが経過し、当時の記憶を鮮明に覚えている人もだんだん少なくなりました。災害は、かならずやってくる。今を、そして未来を生きる子どもたちを守るために、私たち大人がしっかりと記憶・記録を語り継ぎ、対策をする姿を背中で見せることが大切ではないでしょうか。子どもたちを守るのは、大人の役割です。子どもたちも、大人の行動から学ぶことも多いはず。中学生なら十分戦力として期待できます。

すべては平常時のあり方

対策は今日からでも遅くありません。できることから取り組んでいきましょう。例えば、自分の住んでいる回りの地形や環境の特徴を把握し、揺れや液状化に対する想定をする。家具の固定やガラスの飛散防止フィルムを貼るなど。また近年では、集中豪雨による水害も増加傾向にあります。地域防災力は、平常時にどんな準備・想定をしておくかがかかっています。

2

広報たかはま H27.9.1

広報たかはま 9月号に掲載

- ワークショップ「地域の防災力を高めよう」
進行：RSY 松山文紀

参加者を6-7人のグループに分け、グループワークを行い、以下のようにグループワークを進行した。最後にグループごとに発表をした。

1. 個人ワークシートを用いて「日頃取り組んでいる防災活動」について書き出す。
2. 自己紹介を兼ねて1で作成したワークシ

3. トを用いて、グループ内で共有する。
3. 個人ワークシート内の「平時に地域で取り組んでいる防災・減災の活動」に対する課題を模造紙に貼りだしながら共有する。
4. 3で出た課題の中で、グループ内で取り組む課題を選択する。
5. 選択した課題に対して、課題解決に向けた地域で実践しようとする企画を考える。
6. グループごとに考えた企画を発表する。

「地域の防災力を高めよう」…ところで
現時点での地域防災活動の継続課題を出し合い、今後の防災・減災活動に向けた具体的な企画を協議してみよう

1. あなたが平時から自発的に行っている防災・減災の活動(取り組み)を書いてください
2. 1で書いた取り組みについて、課題があれば書いてください
取り組んでいない方は「なぜやっていないのか」その理由を書いてください
3. あなたが平時に地域で取り組んでいる防災・減災の活動(取り組みや案)を書いてください
4. 3で書いた取り組みを実施する際に工夫していることがあれば書いてください
5. 3で書いた取り組みについて、思いのほか課題があれば書いてください

平成27年度 高松市「防災ネット」事務局 編集 2015/08「編集」

個人ワークシート

グループで企画を立てよう

<input type="checkbox"/>	毎年、△△に取り組んでいる	取り組み
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/> → ○○がなかなか進まない	課題
<input type="checkbox"/>	◎◎に	対象
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/> を進める <input type="checkbox"/> をする <input type="checkbox"/> に声をかける 日頃から●●する	<input type="checkbox"/> を進める <input type="checkbox"/> をする <input type="checkbox"/> に声をかける 日頃から●●する

グループワークで使用する模造紙の書き込みイメージ

個人ワークシートの作成を通して、日頃から行っている活動について改めて意識してもらい、その中で課題を整理することで、課題自身が自分自身の課題であることに気付いてもらうことができた。

その後の平時のプログラムの企画立案を行うグループワークでは、進行側から目的やお題が決めず、課題そのものを自分自身の課題であると認識してもらうことにより、「自らが考える課題」に対するプログラムづくりに取り組むことができ、積極的な姿勢がうかがえた。



全てのグループが地域の防災訓練に関する現状について課題として選択し、プログラムづくりに取り組んだ。

各グループからは地域での防災訓練について、以下の課題が出された。

- ・ 実践に役立つ想定・訓練が弱い
- ・ 参加者が少ない
- ・ 実践的な防災訓練ではない
- ・ となり近所とのコミュニケーション
- ・ 新しく来た人、若い人との交流が難しい
- ・ 真剣味が足りない

出された課題に対し、働きかける対象を明確にしたプログラムをつくることとしたが、多くのグループから「若い人」や「子ども」、「転入者」というキーワードが出ており、現在の地域防災活動が限られた層の人が対象となってしまっている現状の認識ができたことに加え、働きかけができていない層の人たちが明確になったことで、今後の地域防災活動に取り組むためのヒントを見つけることができたように感じた。

2. 防災リーダー養成講座（後期）

「みんなで助け合える避難所運営訓練」

- 日時：平成 28 年 7 月 17 日（日）9:00～12:00
- 場所：高取公民館
- 参加：40 名
- ねらい：過去の被災地の経験をもとに、避難所運営の中心になる方々が、住民レベルでもできる、医療や福祉、公衆衛生の「ちょっとした知識・技術・配慮」を身に着けることで、避難所での震災関連死や健康被害を減らすと共に、住民主体の避難所運営の具体的な方法を学ぶための訓練を実施します。

□ 講演「避難所の実態について」

講師：RSY 浦野

4 月 14 日と 16 日の 2 回、震度 7 の激震を受けた熊本地震は、避難生活の多様性や、命と健康と尊厳が守られる運営のあり方が問われる災害となった。震度 6 強や 7 の地震が発生すると、古い木造家屋は倒壊の危険が高くなり、古いブロック塀が崩れたり、宅地の地割れでライフラインが使えなくなることもあった。特に多かったのは、瓦屋根が落下したりずれたことで生じる雨漏りだった。家財道具が水浸しになり使えなくなるほか、揺れから倒壊を免れた家でも、激しい雨に耐え切れず倒壊するというケースもあった。

県内では 18 万人にも及ぶ人々が避難生活を送ることになり、指定避難所となっている小中学校のほか、小規模公民館や駐車場、ビニールハウスや自宅の庭などに避難スペースを作り、劣悪な環境の中で自主避難する人もいた。特に特徴的だったのは、車中泊の多さであった。被災者からは、「子どもが屋根のある場所を怖がる」「ペットから離れられない」「家族に障がいのある方がいる」「余震が怖くて家で眠れない」などの理由が挙がった。



車中泊は移動が激しいため、正確な数や生活状況を把握することが困難で、狭い空間で寝起きすることから、エコノミー症候群のリスクも高かった。多様なライフスタイルが、多様な避難形態を生むという状況は、次の災害でも同様に課題に上ると思う。

一方で指定避難所の課題も深刻だった。特に避難所開設時には、数百人の人々が一気に詰め掛けてくるため混乱を極めた。準備すべき項目や優先順位をあらかじめ理解し、通路を作る、受付を置く、居住スペースは土足禁止にする、トイレの使用ルールを決める、福祉避難スペースを置くなどの必要性に気付き、具体的な対処方法がわかる人々を地域に増やしておくことが重要だ。

避難所には、移動やトイレ、食事などに配慮が必要な高齢者や障がい者なども避難してくる。最近では行政と福祉施設が事前に協定を結び開設される「福祉避難所」もあるが、実際は、被災のひどさや人員確保がままならず機能できないケースも多かった。そのため、一般の避難所の中に「福祉避難スペース」を設け、受け入れることも考えたい。熊本地震では、重症心身障がいのある成人女性のいる世帯が、おむつ交換や身体を拭く場所もなく、周囲の目や配慮のない言葉に深く傷きながら誰にも相談できずに耐えていたという事例があった。専用の部屋を用意したり、医療や福祉の専門スタッフがなくても、施設の 1 室を「多目的室」として開放したり、間仕切りやベッドを優先的に使えるようにするなど、周囲の目配りや気配りを働かせることで安心して居られる場所を提供することは可能だ。とにかく、『人の命と健康と尊厳を守るために必要な最低限の生活環境』がイメージでき、トイレ・居住スペース・食事の改善や、人との関わりが途切れないような場作りをどのように進めていけるか皆さんと共に考えたい。

□ 演習「やってみよう！避難所運営ははじめの一步」

進行：RSY 浦野 愛・椿 佳代

- ★ 1 班 20 名で 2 班に分かれる。
- ★ 1 回 45 分とし、2 班とも①②を体験

① 暮らしの環境を整える

災害が発生して、施設が避難所になったことを想定し、通路確保や手作り布団やベッドづくり、着替え、洗濯干しスペースの設営などを行った。狭い空間でも、どうしたら使い勝手がよく居心地のよいスペースが作れるかを参加者で話し合った。



みんなでレイアウトを考え、役割分担をする



身近にあるものを使って安全性や利便性を確認

② 感染症の予防と対策とトイレ環境の整備

トイレの衛生管理の重要性や具体的な改善方法、ノロウイルス蔓延防止のための対策などについて実演を交えながら解説した。



4月に熊本地震が起きたばかりであったことなどから、どの参加者も他人事ではないといった表情で真剣に取り組んだ。また、特に男性の参加者にとって、これまで嘔吐物の処理など、感染症防止対策などの実践はほとんどないので、講師の話を食い入るように聞いていた。

参加者からは、おおむね好評を得られた様子であった。また、次年度以降も引き続き同様の講座の開催が求められ、より多くの市民が学ぶべきだとの意見もあった。

3. 津波避難訓練

(平成28年度高浜市総合防災訓練)

- 日時：平成28年9月4日(日) 7:30～11:30
- 場所：(一次訓練会場) 田戸町・碧海町・二池町各町内会拠点 (二次訓練会場) 高浜小学校
- 参加：約300名
- スケジュール

時間	内容
7:30	地震発生
7:40	タオル掛け訓練・調査
7:45	大津波警報発令(住民に避難指示)
8:00	避難行動開始
8:30	高浜小へ避難完了
9:00	総合防災訓練開会式
9:15	訓練開始 ・簡易担架組立・搬送訓練 ・応急手当 ・テント組立

	・簡易トイレ訓練
10:00	防災講話(RSY 栗田)
10:45	応急危険度判定士による避難所開設前の安全確認説明会
11:00	終了挨拶・講評
11:30	解散(炊き出しのおにぎり配布)

田戸町・碧海町・二池町各町内会が主体となった一次訓練では、各役員等が主体となって「タオル掛け」の呼びかけ・確認等を実施し、住民は避難のため、順次集合場所に集まった。おおよその住民が参集したところで、RSY担当者から「津波から避難する際の留意事項」を配布し、解説を行った。特に、津波からの避難は、東日本大震災からの教訓として、「できるだけ早く！より高く！」が最大のポイントとなるが、高浜市への津波到達時間は83分と想定されているため、落ち着いて行動すれば、全員が助かることができるという点も強調した。ただし、避難する際には、隣近所で声をかけ合い、要救助者にも配慮することを確認

した。その後、町内会単位で、避難所の高浜小学

校へ徒歩で移動した。

平成 28 年度「高浜市総合防災訓練」

津波から避難する際の留意事項

1. 強い揺れによる室内の散乱や火の始末、屋外では落下物や地割れ・液状化等、さらに相次ぐ余震などに十分注意して、まずは自身の安全の確保に努める。
2. 落ち着いて、すばやく避難行動をとる。「できるだけ早く！より高く！」
 - 可能な限り「動きやすい服装」で
 - 可能な限り「履き慣れた運動靴」で
 - 間に合えば「非常持ち出し袋」を背負って（両手は解放する）
 - 財産より、まずは「いのちが最優先」
 - 家を出る前に「ブレーカー」を落とす
3. 家族・隣近所て声を掛け合う。大声で「津波が来るぞ！逃げろ！」
 - 地震発生から津波到着までは約77分。早く避難の判断をすれば、誰でも十分逃げ切れる
 - 要救助者は、地域で協力し合って車やリヤカーなどで避難させよう
 - 可能な限り地域で助け合って、標高の高いところへ（逃げ遅れた場合でも、あきらめずに近くの高い所へ）
 - 消防団員であっても、自分の身を犠牲にしてまで救助活動はしない

裏面へ続く

ばあちゃん「逃げなくていいよ、
「でも逃げなくちゃ」とカ入れ戸を開ける
(岩手県釜石市 震災当時小学4年 女子)

学校から家に帰ってテレビを見ていたら、地震が来ました。家にいたのは、ばあちゃんと私の二人だけでした。家の玄関のドアがなかなか開かなくて困ったけど、思いっきり力を入れたらガラッと戸が開いたので、ばあちゃんと一緒に避難しました。ばあちゃんは「逃げなくていいよ」と言ったけれど、私は「逃げなきゃだめだ」と思いました。どうしてかという、小さいころから、親に「ここ海に近いから、昔も津波がいつい来たんだよ」と、ウルサイほど言われていたからです。その日の夜は、父さんも母さんも、どこにいるのか、生きているのかさえ分からずに、「家がなくなっちゃったら、どうしよう」とか考えたりしていて、あまり眠れませんでした。

一日前プロジェクト エピソード（平成23年3月東日本大震災より）

港小学校は津波のリスクがありますので、絶対に避難しない下さい。津波警報や大津波警報が発令された場合の避難所は「高浜小学校」です。

【2016年8月17日現在案/RSY作成】
【2016年8月18日/高浜市修正】



微笑ましい若い世代も参加



町内会単位で移動

指定避難所であり、今回の避難訓練の集合場所にもなった高浜小学校には、続々と住民が参集し、今年度の高浜市総合防災訓練としての第2部がスタートした。なお、住民に対して、氷で冷やした保存水が中学生ボランティアらの協力で配布され、夏の暑い日の徒歩訓練で乾ききった住民の喉はもちろん、心をも潤した。

総合防災訓練では、吉岡高浜市長から、行政としても一生懸命対応するが、主役は住民だと、参加者らを激励する挨拶からスタートした。また、「シェイクアウト」も実施された。この訓練は「しゃがむ・かくれる・まつ」という単純な地震発生時の動作の訓練だが、初めての人にとっては何をすればいいのか、わかりづらい。しかし、参加者全員がグラウンドに一斉にうずくまったところを見ると、これまでもこうした訓練が繰り返し実施されたものの成果だと感心した。

その後、参加者は体育館等に移動し、あらかじめ「南部まち協」が計画した「簡易担架組立・搬送訓練」「応急手当」「テント組立」「簡易トイレ訓練」を実際に順次体験した。他都市ではあ

りがちな「住民は見ているだけの訓練」とは違い、実際に体験するメニューとして仕込んだため、各コーナーを取り巻く参加者の輪は絶えることなく、真剣かつ充実した顔つきで様々な防災知識とスキルを習得することにつながった。

引き続き実施した RSY 栗田による防災講話でも、まち協による創意工夫と事前準備が功を奏し、「体験型であったこと、地域ぐるみで参加できたこと、行政依存ではなく住民主体の訓練であったこと、老若男女、特に中学生の活躍がすばらしかったこと」などの感想を述べつつ、しかし熊本地震など、実際の災害現場は想像以上に厳しいという現実も一方で伝えた。暑い体育館の中ではあったが、参加者の真剣なまなざしが印象的であった。また、応急危険度判定士による避難所開設前の安全確認の説明もあり、自宅の耐震化の重要性も含めて、丁寧な説明があった。

最後に、女性会が今回の訓練に合わせてこしらえた炊き出しのおにぎりが参加者に配布され、おいしくいただきつつ、解散となった。



氷入りの保存水の配布



シェイクアウトの様子



日赤ボランティアの指導による応急手当訓練



際立った中学生の活躍

4. 外国人向け防災・減災イベント
「ジシン・カサイ・ゴキンジョってなあに？」

- 日時:平成 29 年 2 月 25 日(土)13:30~16:30
- 場所:八幡・新田町内会館さずな
- 参加:約 50 名

高浜市に居住する多くの外国人(主にブラジル人)に対して、地震について具体的な安全対策を各家庭や地域で取り組めるよう啓発した。

事前告知は、市の広報誌にて全戸告知すると同

時に、ブラジル食材の店にもチラシを貼りだしてもらった。さらに3日前には、外国人居住者の多い県営吉浜住宅(会場から徒歩5分)の外国人宅にチラシをポスティングした結果、開始時間前から人が集まってきた。

受付時に、絆創膏と子どもにはミニ消しゴムを渡し、会場内を回ってチラシにスタンプを集められること、2時から屋内で学習会をする流れを説明した。

会場の八幡・新田町町内会長も来場いただいた。

□ 地震の揺れを体験する「なまず号」試乗

外国人参加者の多くにとって、初めての「地震」体験だったようで、自分一人が机の下に隠れる行動をとるのに、夢中になってしまう人もいた。



□ 消火器の取り扱いを学ぶ「水消火器」体験

市職員の指導により、適切に操作を学ぶことができた。しかし、実際には、消火器がすぐに手に入る場所になければ、消火活動ができないことから、自宅でも消火器を常備すること、集合住宅等のどこに配置されているかを知ることなどが肝心である。



□ 煙体験

市の消防職員の指導により、口と鼻をハンカチなどで覆い、煙の中を姿勢を低くして壁伝いに進み、脱出する訓練を行った。子どもはもちろん、お年寄りも体験していた。

地震後の現場では、停電で真っ暗だったり、障害物があったりするなど、足元が不安定になることを想定し、あかり（ヘッドライトが理想）を持ち歩くことが大事などの補足説明も適宜行った。



□ 万が一の時に大声で助けを求めるための「大声コンテスト」

騒音測定機に向かって大声で「助けて」「火事だ」と叫んでもらい、声の大きさを測定した。そのあと、実際には大声を出し続けることは難しいこと、そこで笛を常備しておくこと役に立つことを説明しながら、防犯笛をプレゼントした。

子どもから大人まで 楽しめて、啓発につながるイベントの一環として実施した。



□ 自分の住まいを地図上に示して被害想定や最寄りの避難所などを確認

高浜市の住宅白地図に町内会のラインを引いた地図を準備し、参加者の自宅や職場、子どもが通う学校等にシールを貼って、最寄りの避難所や避難に適した安全な経路などを考えた。家族間で、学校の場所を確認するきっかけにもなっていた。

実際の生活圏は、隣接する市町にまたがっていることがあり、地図からはみ出して行動していることを実感する参加者もいた。



□ 高浜市の地震災害の特徴や緊急時の対応をポルトガル語／日本語で併記した「地震ガイドブック」の配布と解説

吉岡高浜市長の挨拶に続き、南海トラフ巨大地震を意識し、日本人でも外国人でも最低限知っておくべき言語などコンパクトにまとめたガイドブック（平成 27 年度作成。A3 二つ折り両面）を使って、地震が発生した際の「揺れ」「津波」「液状化」「火災」の被害予測、現象の事例、その対策、避難所での心構えなどを伝えた。市の消防からも地震に備えることについての説明があった。参加者は、日本人と外国人（主にブラジル人。日系人含む）が半々だった。ポルトガル語通訳者がいたので、外国人も熱心に耳を傾けていた。



□ ブラジル人が好む味に調理した「炊き出し（ホットドッグ）」

日本人ボランティアのほかに、ポルトガル語のできる日本人ボランティア、ペルー人、フィリピン人ボランティアも一緒になって炊き出しの準備をした。ソーセージ、独特の香辛料のトマトソースを大鍋で温め、フランスパンにはさみ、その上にこまごまに砕いたポテトチップスをたっぷりまぶした特製ホットドッグを作った。飲み物はガラナジュース。食材は、ブラジル食材業者から仕入れた。ホットドッグを食べながら、参加してみて初めての地震体験の感想をいい合ったり、ご近所同士久しぶりに顔をあわせて話がはずんだりしていた。

※ 参加者の声

- ・（隣の学区から参加したブラジル人お父さんは）息子の小学校のPTAとしてサッカー指導などでかかわっているので、自分の学区にも伝えたい。
- ・自分の周りの人（外国人）の災害に対する意識は低く、今日も誘ったが、来なかった。私は今日参加して、学ぶことがあったので、次回は、もっと積極的に誘ってみようと思う。
- ・昨年と今年開催し、少しずつ定着してきた。来年はもっと来ると思う。



※ 当日の取材／中京テレビ・名古屋テレビ（いずれも同日の夕方ニュースで放映された）